
錯覚視

シモ・ヘイヘ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

錯覚視

【Nコード】

N6086D

【作者名】

シモ・ヘイヘ

【あらすじ】

北海道警察刑事課の杉山泰弘は不可解な事件に巻き込まれていた。そこにかつての知り合いである北海道工業大学工学部の助教授が現れて…

錯視るゝとまるゝ（前書き）

某有名小説に酷似していますが僕が以前から書きたかった題材なので掲載させていただきます。

錯視るゝとまるゝ

北海道 道東のとある田舎道。

畑と農道が碁盤の目ようになってる。

山下信彦は、何時ものように車でこの田舎道を突っ走っていた。

時速75キロ。人通りも少ない道なので、このスピードでも危険はない。

「…続きまして臨時のニュースです。先程、午後3時頃に市内のコンビニエンスストアで強盗がありました。未だに犯人は逃走中で…」

やれやれ。この田舎町も段々と騒がしくなってきたな。

山下はラジオを切り、窓を開けた。

爽やかな秋の風が車内を通る。

ん？

山下は100メートル程先の交差点を見つめた。
秋の午後3時頃の夕日が眩しかったので、はつきりは見えないが交
差している道に車が見えた。

しかし車は動くそぶりを見せない。

山下は少し心配になった。

こんな時間に農家じゃないだろうし…まさかさっきの強盗か？

次第にアクセルを踏む足に力を入れる山下。

交差点が近付いていく。

車は停まったままだ。

しかし交差点を過ぎようとした時にとんでもない事が起きた。

山下の車と停まっているはずの車が衝突したのだ。

互いに時速75キロ程のスピードであった。

救急車で運ばれた山下は、なんとか一命を取り留めた。

同じ頃、事故現場に刑事課の杉山泰弘が到着していた。

当事者達の証言があまりにも不可解だった。

山下と衝突した車を運転していたのは市内で働く田中という男だった。

そして二人とも

「車が停まっていた」と証言したのだった。

事件性は薄いですが、気になる事は調べないと気が済まないというのが杉山の性格だったのだ。改ページ

杉山は、ある男を訪ねに行った。

北海道工業大学 略して北工大。

その工学部機械科学学科第5研究室。

杉山はボードに

「大川秀樹助教授 在室中」の磁石を見つけると 部屋に入った。

中には見たことも無い機械やら、使いつばなしにされた器具やら、読み掛けの科学雑誌などが散乱していた。

錯視る 後編

杉山が部屋の奥に行くと大川が黒板に向き合っていた。

「よう。久しぶりだな。」

杉山が声をかける。

「…違うな……ナトリウムのイオン化傾向を考えたら……むしろ亜鉛の方が効率がいい。しかしそうすると…析出しにくいな…」

「こんにちは！聞こえているか？」

「ダニエル電池の応用……実用性がないな。」

「大川！本気で怒るぞ！」

杉山が声を荒げた。

「…では、聞くが…君は本気でないような怒り方をしている相手に本気で怒るぞといわれたらどうするんだ？」

君は怒る程度を自由に換えられるのか？」

大川が長々と反論する。

「また理屈か…偏屈な奴だな。」

「理屈を唱えるからといって偏屈というのは…」

「これは統計学だ。論理的だろう？」

杉山は勝ち誇ったような顔をした。

「捜査協力を頼む。」

大川は溜息をついた。

「ふう…久しぶりだな。杉森。」

「ああ。だが杉山なんだがな。」

「現場に案内してくれ。」

二人は事故現場に向かった。

「車のスピードは？」

大川が聞く。

「75キロ程度だ。でも確かに車は停まって見えたと二人とも言っている。」

大川は腰に左手を、顎に右手をあてて考えている。

「一番疑うべきはその二人が嘘をついているということだ。」

「君も上司と同じ意見だな…。」

「理論的な考え方だ。」

「どちらかといえば保守的だと思うがな。」

大川は今度は首を回しながら道路を歩く。

「障害物はないみたいだな。」

「事件の起きた時もそうだったみたいだ。」

「ふむ……。」

「ま、スピードが速過ぎてドップラー効果で何か見間違えたんじゃないか？」

「75キロじゃあ、それはないな。ドップラー効果には膨大なスピードが必要なんだ。…でも君の意見は実に興味深い。」

「何か分かったのか？」

「まだ仮説の段階だ。さて、帰って論文の続きを書かなきゃな。」

それだけ言うと、大川は車に乗り込んでしまった。

大学まで送る届けると

「詳しい事が分かったら連絡する」と一言言って帰ってしまった。

翌日、大川から電話を受けた杉山は北工大に向かった。

「早速種明かしだ。まず、事件が起きた時効。今の季節の3時…西日のせいで視界は良くなかったと仮定する。」

「ちょっとまで。やっぱりただの見間違えだったのか？」

「慌てるなよ。とにかく端的に言えばそういう事になる。つまり…」

車に乗り、フロントガラスに注目してみよう。

近くに電信柱があつたら両端にそれが映る。

今度は遠くの電信柱を見てみよう。

フロントガラスの中心に背景と共に映るはずだ。

ちなみにこれは道が直進しているときに起こる現象だ。

電信柱は徐々に大きくなる。

と同時にフロントガラスの両端に移動していく。

よってフロントガラス上には両端に向かう流れがあるのと等しい。

ここで車の登場だ。

フロントガラスの左端から右に移動していく車（逆も可能だ。）があるでしょう。

ガラス上には両端に向かう流れ、車は中心に向かう流れ。

これが釣り合うとガラス上の一定点で車が動かなくなるんだ。

これが今回のトリックだ。

「どうだい？」

「…鮮やかだな。見事だよ大川。」

「そんなことよりも、何かしら対策が必要じゃないのか？」

数日後、新しく信号機が各交差点に設置された。

杉山は北工大の研究室にいた。

「個人的には、あまり効果が無いようにも思っがな。」

杉山が愚痴をこぼす。

「どうでもいいが、何故君は研究室に無断で居るんだ？」

「まあ、あまり気にするなよ。」

「全く…コーヒーはインスタントでいいな？」

杉山は本当は嫌だったが仕方なく従った。

「とにかくありがとうな。今回は助かったよ。」

「そう思うなら、もう来ないでくれ。論文に支障を来たすかもしれ
ん。」

「飽くまで皮肉屋だな。」

杉山はコーヒーを飲んだ。随分薄いなと感じていた。

「あ、それからそのコーヒー。賞味期限は怪しいが気にしないで飲んでくれ。僕は特に問題が起こらなかったから大丈夫だと思う。」

やはり皮肉屋だと杉山は強く感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6086d/>

錯覚視

2010年10月9日21時01分発行